

「 想定内へ変えるために 」

鹿児島県 喜界町立喜界中学校 3年 小山 光こやま ひかり

「ここで、大きな土砂崩れがあったんだよ。」

8月6日、車で竜ヶ水の国道を走っていた時、母が言った。大きな土砂崩れ。それは、私が生まれていない1993年の8月6日に起こった、八チロク水害のことだった。気になって調べていた時に、竜ヶ水で起こった土石流の再現映像を見つけた。人々のために災害と戦ったある警察官の話だ。

その年、冷夏や豪雨など、日本各地で異常気象が起きた。いつまでも梅雨明けしない鹿児島付近では、梅雨前線が停滞し100年に一度の大雨に見舞われていた。竜ヶ水駅では、運行していた電車は線路が冠水し、その反対側を土石流で塞がれた。その結果、電車内で650人が孤立してしまった。夏休み中ということもあって、電車も混み合っていたそうだ。このあたりの地層は硬い岩盤に軽石が薄く張り付いており、また、急斜面の谷が多く重なり合う地形のため水害や土砂崩れが起きやすい、と映像の解説にあった。1977年にもこの場所で大規模な土砂崩れが発生し、9人が死亡している。危険だと判断した車掌は乗客を国道に避難させた。しかし、国道は車が多く渋滞しており、泥水が次々に流れ込んでくるため逃げ場は無かった。そして、全員が避難した頃に2度目の土石流が発生。人々はパニック状態になっていた。桜島フェリーが救助要請を出されていた中、桜島の裏側からも漁船が救助に向かっていた。養殖イカダや漂流物が多く、大きなフェリーでは接岸できる場所が無かったからだ。そして、3度目の土石流が発生し、逃げ遅れた10名が海に投げ出されてしまった。死にかけていた警察官だったが瓦礫を押し上げ、土石流から生還した。そして自分が負った怪我を忘れ、救助に移った。漁船でやってきた漁師たちも、骨折した人やお年寄り、小さな子供を優先に救助を始めた。国道は膝上まで冠水していた。イカダにつかまって凍えている人も救助し、最後の船が出た。警察官の8時間の死闘が終わった。危険にさらされた650の大切な命。全員は助からなかった、と彼は泣いていた。私は死にそうな体で最後まで救助を行ったこの警察官や協力した人たちを素晴らしいと思った。私が以前住んでいた場所でこのような大きな災害があったことを私は知らなかった。今住んでいる島も無縁ではない。私が小学4年生の時、喜界町で50年に一度の大雨が降った。その時の道路は泥水で溢れて、たくさんの車が行き交っていた。親が子どもたちを学校に迎えに行ったからだ。きっと、竜ヶ水付近もこのような状態だったのだと思う。それに加えて逃げ場もなく、いつ土石流が発生するかも分からない。人々がこの恐怖と寒さ、不安でパニックになってしまうのは当然だと思った。

私たちがこのようなパニック状態になってしまうのは、「想定外」だからであると書かれていた。100年に一度だからと言って、八チロク水害は決して特別ではない。普段からの備えをしておくことによって想定内にしておかなければならない。その大切さを専門家は私たちに訴えている。

私たちが訓練をする意味や昔の災害について学校で何度も学習する意味がよく理解できた。人間は自然災害に抗えない。「想定外」を「想定内」にするために地域の人々は真剣に取り組みを考えてくれている。それを私たちが無駄にしてはいけない。もっと一人一人が過去の出来事について理解し、訓練のときには真剣に取り組む。そして、今ある知識を周りの人に伝えることが大切だと思う。八チロク水害の大きな原因は、異常気象だった。私たちは今、異常気象の中に生きている。地球温暖化が進み、降水量も増えてきている。土砂災害の危険は十分にあり、他人事ではないのだ。「想定内」の状況に近づけるため、これからの生活を変えていこうと強く思う。